

## 和服構成における標準寸法について

羽 生 京 子

### I はじめに

これまで私は「和服構成における体型と縫製との関係」と題して、主として明治以降、和服を縫製する際に用いられる標準寸法について究明してきた。

裁縫教科書や一般家庭の主婦向けに編集された裁縫書に、標準寸法が表示されるようになったのは明治時代中期のことである。そして、その寸法は洋裁における参考寸法のように、体格に合わせて何段階かに分割されているものでもない。「衣服は人々の身長や肥瘦、または用途や好みによって多少の斟酌を要す」としながらも個々の衣服の寸法を規定している。

このように、和服縫製上欠くことのできない標準寸法が、江戸時代後期の書籍に記載されるようになってから、それぞれの時代の体格や着装方法あるいは流行の変化により、変遷するさまを本学紀要<sup>1)</sup>に報告している。その結果、流行に左右されるものに袖丈があり、体格の変化によるものに身丈とゆきがある。そして、比較的固定化されているものに身幅が挙げられている。そうしたなかで、着装美を表現するものの一つに衿元があることに視点をおいて、その要因は繰り越し量と衿肩明き寸法の相関関係にあるものと想定して、これまで標準型のスタンによる着装実験を行ってきた。

そこで今回は、その結果を総合的に分析し、平成2年度卒業の学生の協力をえて、標準寸法とは何かを考察してみた。

### II 繰り越し量と衿肩明き寸法との関係

江戸時代に刊行された裁縫書が裁ち方を中心として編集されていることもあって、布を裁つ際の寸法は記載されているが、仕立て上がりの寸法、いわゆる標準寸法について記述されるようになるのは江戸末期のことである。ある一定の大きさを裁っている以上、制限はあるにせよ、その人その人の体格によって、経験から生み出される寸法がある。これが長い間に

固定化されて標準寸法になったものとみることができる。

明治時代に入って教育が個人教育から集団教育に移行するなかで、標準寸法はより極め細かく、より細部にわたって記載されるようになった。

衿肩明き寸法は縫製するうえで必要不可欠のものであるから、早くから書き記されているが、着装しだいで融通のきく繰り越し量が標準寸法の仲間入りをしたのは昭和15年以後のことである。ゆったりとした着装から衣紋をあまり抜かない、きりっとした形で着ることが好まれるようになってからのことである。すなわち、和服の肩山をあまり後ろに移動させないで、肩線に合わせて着るようになったころと時期を同じくしている。

この着装の変化によって生じた繰り越しの考え方は、衿肩明きの裁ち方の変化にもつながる。もちろん、以前から2、3の例外はあるにはあったが、多くの場合直線に明けていた衿肩明きを、繰り越しを利用した曲線裁ちが目につくようになったのもこのころからである。始めは改良と名のつくものに多く見られた曲線裁ちも、現在は長着などにも採用されるようになっている。

以上のことを踏まえて、これまでに標準型スタンを用いて着装実験を行なった。その実験内容と結果は次の通りである。なお、試着衣はすべて市販の縞木綿布である。

#### 〔実験内容〕

1. 裁ち切り衿肩明き10cm、繰り越し2cm、直線裁ちの長着により、着装時の肩山移動による衿元の変化<sup>1)</sup>
2. 衿肩明きの明け方（直線裁ち・曲線裁ち）による衿元の変化<sup>2)</sup>
3. 直線裁ち衿肩明き寸法の変化による衿元への影響<sup>3)</sup>
4. 曲線裁ち衿肩明きの曲線の描き方による衿元への影響<sup>4)</sup>
5. 直線裁ち・曲線裁ち各々の繰り越し量と衿肩明き寸法との関係<sup>5) 6)</sup>

#### 〔実験結果〕

1. 直線裁ちは繰り越し量を多くした場合は、衿肩明き寸法を小さくする。具体的には繰り越し2cmのときは衿肩明き10cm、3cmの場合は9.5cm。
2. 曲線裁ちは繰り越し量を多くした場合は、衿肩明き寸法も大きくする。具体的には繰り越し2cmのときは衿肩明き10cm、3cmの場合は10.5cm。
3. これらの結果を総合すると、繰り越し量2cm、裁ち切り衿肩明き10cmについては衿肩明きの明け方に影響されることなく、一応満足のいく衿元が得られ、妥当なものと判断された。

### III 被験者による着装実験

#### 1) 被験者Aの体型

標準寸法で製作した試着衣を、標準型のスタンに装着させて種々の実験を行ない、前に述べたような結果を得た。そこで、これまでの実験結果を確認するために、標準型スタンの計測数値になるべく近い体型の被験者を選んで、着装実験を試みることにした。被験者Aの計測結果は第1表の通りである。

以上、この表によって和服用のスタンは着装用として造られているためか、出来るだけ凸凹が少なく、撫で肩になっている。したがって、被験者Aは標準体型とはいえ、胸部上面角度が大きく、左右の肩の傾斜角度が小さい。

#### 2) 試着衣の条件

今回、被験者Aが装着した試着衣は、前述の実験結果1、2の項目で取りあげた次の4種である。

I 直線裁ち衿肩明き 明き寸法 9.5 cm 繰り越し量 3 cm

II 直線裁ち衿肩明き 明き寸法10.0 cm 繰り越し量 2 cm

III 曲線裁ち衿肩明き 明き寸法10.0 cm 繰り越し量 2 cm

IV 曲線裁ち衿肩明き 明き寸法10.5 cm 繰り越し量 3 cm

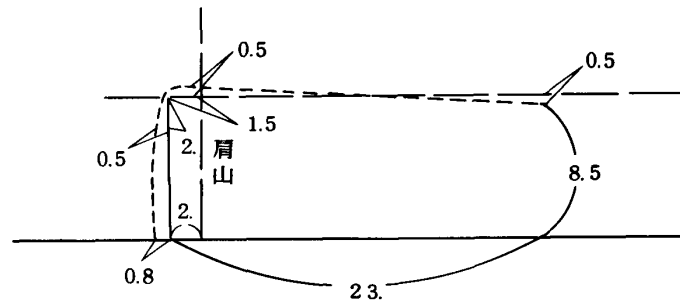
これ以後は略して、I、II、III、およびIVと称する。

なお、試着衣の仕立て上がり寸法は、藤田とら著『改訂新版 和服裁縫』<sup>7)</sup>を規準として製作している。衿つけの肩回りの縫い方と、曲線裁ち衿肩明きの曲線の描き方は、先の一連の実験の際に記載されているが、参考のため第1図と第2図に表示した。

第1表 被験者とスタンの体型比較

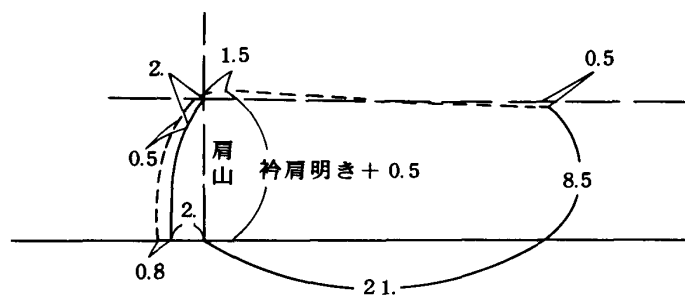
測定部位	被験者A	スタン	測定部位	被験者A	スタン
高さ(頸椎点から床まで)	137.0 cm	140.0 cm	胸部上面角度	31.2°	24.2°
頸付根囲	36.0	39.0	背部上面角度	23.3°	23.0°
胸囲	82.0	80.0	左肩傾斜角度	16.1°	27.5°
胴囲	63.0	67.5	右肩傾斜角度	22.9°	25.5°
腰囲	90.0	87.5			
ゆき	67.0	68.0			

[ I - 1 - a ]



直線裁ち衿肩明き

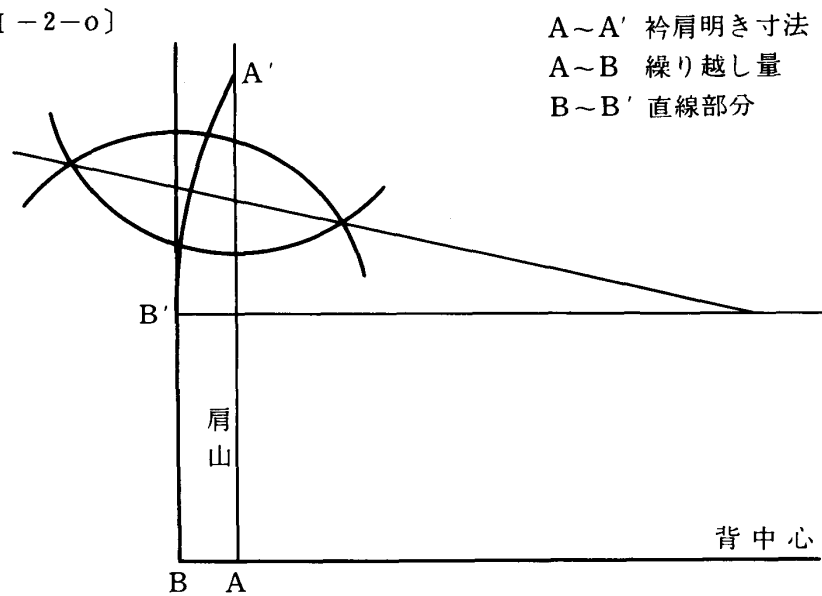
[ I - 2 - a ]



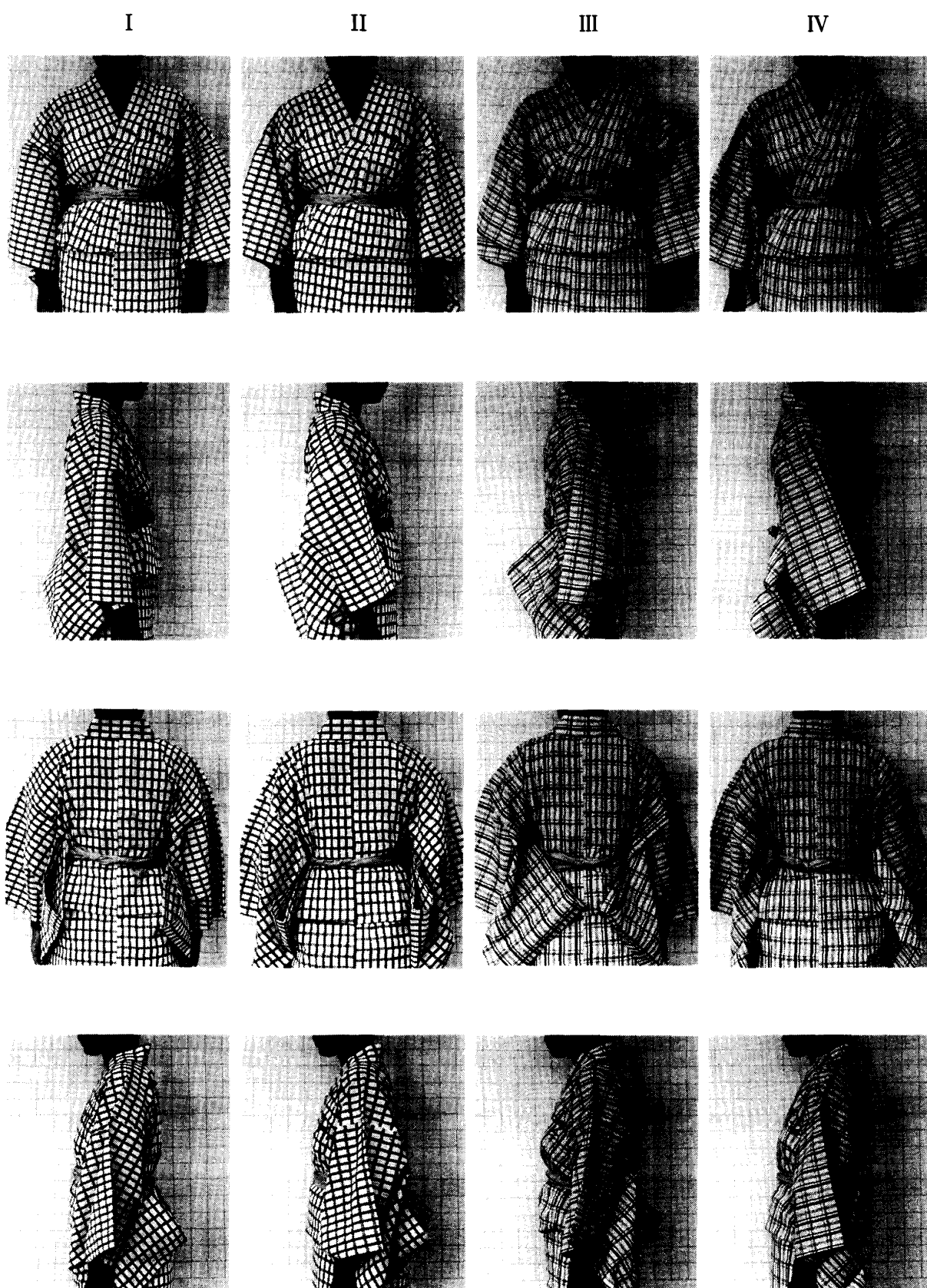
曲線裁ち衿肩明き

第1図 衿肩明き位置および衿つけ標示

[ I - 2 - o ]



第2図 曲線裁ち衿肩明きの明け方<sup>8)</sup>



第3図 着装実験 前面、背面、左右側面

## 3) 着装の条件

基本的には、スタンに着装させたのと変りはない。肩山を肩線にあわせること、おはしりを整えるときに上下の衿つけ線を揃え、まっすぐ通すように着装させるように配慮した。

以上のような条件で、4種の試着衣を被験者Aに着装させ、5cm方眼の前で、前面、背面および両側面より撮影したのが第3図である。

## 4) 実験結果

一応、スタンによる種々の実験によって選択された試着衣であるから、ゆったりとそれぞれの持味を出している。実験の結果、次のようなことが把握された。

1. 前面の交差位置が異なる。直線裁ちのものは交差位置が低く、曲線裁ちは位置が上がる。背面の衿のつけ方による影響で曲線のものはネックポイントが頸付根側点に近づき、衿が首に巻きついた形になる。
2. 背面の衿つけ線は衿肩明き寸法と繰り越し量との関係でそれぞれの、弧を描いているが、試着衣Iは衿つけ側と衿山側の寸法の差が小さく、四角に近い形になっている。
3. 怒り肩は和服が似合わないといわれるが、被験者Aの左右側面写真によると右から撮影したものが、自然体となっている。計測によると左の肩があがっている。左の肩からのものは、それぞれ異なった表情を持ち、殊にIIIは前こごみに見える。

以上を総合して試着衣II、すなわち、直線裁ち衿肩明きで裁ち切り衿肩明き寸法10cm、繰り越し2cmのものが、一番受け入れやすい姿である。標準寸法にこれが採用されているのも頷ける結果となった。

第2表 採寸部位の計測結果

	採 寸 部 位	被験者B	被験者A	被験者C
イ	身長	154.0 cm	160.0 cm	167.0 cm
ロ	尖椎より外踝まで	123.0	130.0	138.0
ハ	肩中央から乳まで	20.5	27.0	24.0
ニ	ウエストから肩を通過してウエストまで	78.0	80.5	89.0
ホ	ウエストから背中心衿付線まで	36.5	38.0	41.0
ヘ	頸付根囲	35.0	36.0	38.0
ト	腰囲	84.0	90.0	99.0
チ	掌囲	19.5	21.0	22.0
リ	腕付根囲	35.0	38.5	39.5

#### IV 体型の異なる被験者による着装実験

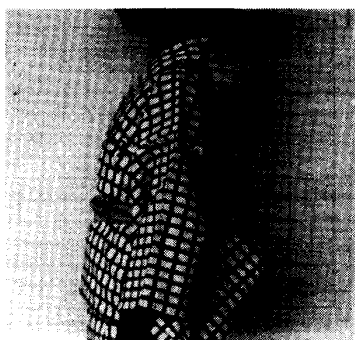
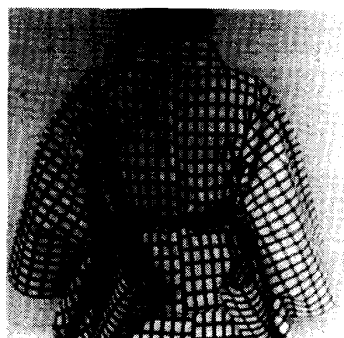
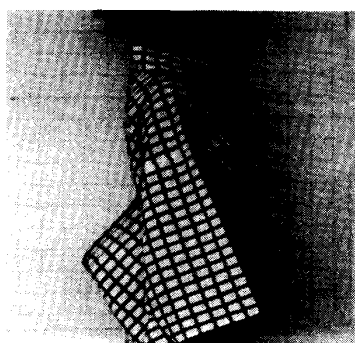
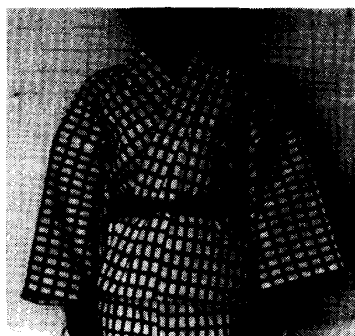
標準型被験者による着装実験は、標準型スタンに類似した体型の被験者を選び、これまでの実験の成果の確認を目的としたものである。その結果は前述のように、4種の試着衣はそれぞれ現在の若い女性にも適応するものと判断された。

そこで本研究のもう一つの目的である、「標準寸法が体型の変化にどの程度まで対応できるか」すなわち、標準寸法の許容範囲を究明することとした。まず、被験者Aとは対象的な小柄で痩せぎみな被験者Bと、背が高くやや怒り肩で体格の良い被験者Cを選んで、着装実験

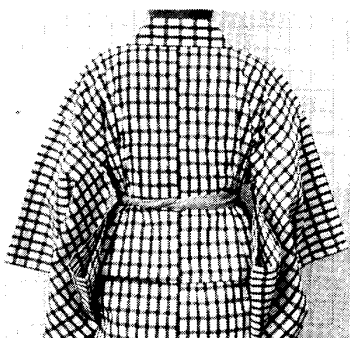
第3表 被験者の仕立て上がり寸法

名 称	割 り 出 し 法	被験者B	被験者A	被験者C
身 丈	身長	154.0 cm	160.0 cm	167.0 cm
着 丈	実測（尖椎より外踝まで）	123.0	130.0	138.0
衿	着丈 $\times 1/2 - 2. \sim 3.$	59.0	66.0	66.5
肩 幅	衿－袖幅	28.5	32.0	32.2
衿肩明き	頸付根囲 $\times 1/4$	8.8	9.0	9.5
身八つ口	掌囲 $\times 1/2 + 2. \sim 4.$	12.8	13.5	14.0
前 幅	腰囲 $\times 1.5 \times 1/2 \times 12/35$	21.6	23.0	25.5
後 幅	腰囲 $\times 1.5 \times 1/2 \times 15/35$	27.0	29.0	31.8
衤 幅	腰囲 $\times 1.5 \times 1/2 \times 8/35$	14.4	15.0	16.9
合 裷 幅	衤幅－1.5	12.9	13.5	15.4
衤下がり	実測（肩中央から乳まで）	20.5	27.0	24.0
衿 下	身丈 $\times 1/2 + 2. \sim 4.$	80.0	83.0	86.5
袖 丈	身丈 $\times 1/3$	51.3	53.3	55.7
袖 つ け	腕付根囲 $\times 1/2 + 2. \sim 4.$	20.5	22.3	22.8
袖 口	掌囲 $\times 1/2 + 10. \sim 12.$	20.8	21.5	22.0
袖 幅	衿 $\times 1/2 + 1.$ 内外	30.5	34.0	34.3
衿 幅	規定寸法	5.5	5.5	5.5
繰り越し	採寸部位（ニーホ $\times 2$ ） $\times 1/3$	1.7	1.5	2.3
〔備考〕 1. 衤下がりとは肩山からの寸法記載 2. 衿肩明きは上がり寸法記載 3. 寸法に幅のあるものはその真中の寸法を採用				

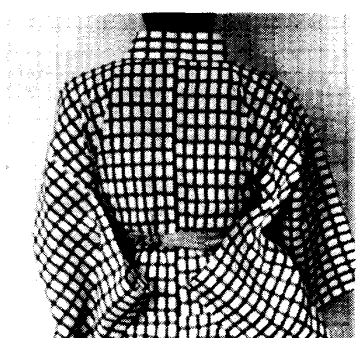
被験者 B



被験者 A



被験者 C



第4図 着装実験 前面、背面、左右側面



を試みた。試着衣は4種のなかから、一番妥当だと判断された試着衣II、つまり、直線裁ち衿肩明きで裁ち切り衿肩明き寸法10cm、繰り越し量2cmのものを採用した。なお、各被験者の体型を把握するために、和裁研究室の仲村洋子が『和洋女子大学紀要』に発表している「割り出し法」<sup>9)</sup>によって、それぞれの仕立て上がり寸法を算出してみた。「割り出し法」に必要な被験者の各部位の採寸結果は第2表に、仕立て上がり寸法は第3表に掲示した。

この表は被験者A、すなわち、標準型を中央に据えて、BおよびCの体型の相違を明確にするように配慮して作成したものである。算出された数値は三者三様で、Aは大体標準寸法通りであるが、剣先位置が下がっている。Bは全体的に小さいが反り身のせいか、他と比較して繰り越し量が多い。Cは全体的に大きく2分の1の身幅が標準より7.7cm広くなっている。こうした体型の異なる三者に試着衣IIを着装させ、5cm方眼の前で前後、左右から撮影したのが第4図である。

実験結果はそれぞれ表情は違うが概ね良しとみなされる。被験者Bは身幅が広過ぎるため、腰より下を少し右に寄せて着装しているが、この程度ならば歩行に支障をきたすほどではない。反り身のためか前面交差位置があがり、衿がねた形となって背面の衿肩明きが大きく見える。被験者Cは腰囲が大きい割には身幅の不足を感じさせない。怒り肩のため衿が立つ形になるので、襷じわが目につき、ゆきが一層短くなる。

## V ま と め

これまで、種々の面から平面構成の標準寸法とは何かを探ってきた。日本人の衣服として長い歴史のなかで育まれた寸法が、着装によってそのよさを発揮する衣服ならばこそとも言えるが、今更ながらその重みを感じさせられた。その時々を着装者の体格や着装方法の違いを把握しながら、その寸法を少しずつ変化させていく知恵は、科学性には乏しいかもしれないが、人間的な温かみがある。和服が科学では割り切れない日本人の持つ融通性とおおらかさを備えているためであろう。

〔付記〕

本研究を作製するにあたって、永野順子教授のご指導をいただき、和裁研究室の仲村洋子講師、伊藤瑞香氏、椎橋多恵子氏のご協力をえた。

## 引用文献

- 1) 羽生京子：和洋女子大学紀要24—2 P 101～118 1983
- 2) 羽生京子：和洋女子大学紀要25—2 P 55～81 1984

- 3) 羽生京子：和洋女子大学紀要26 家政系編 P 149～169 1986
- 4) 羽生京子：和洋女子大学紀要27 家政系編 P 69～78 1987
- 5) 羽生京子：和洋女子大学紀要28 家政系編 P 83～92 1988
- 6) 羽生京子：和洋女子大学紀要29 家政系編 P 149～158 1989
- 7) 藤田とら：改訂新版 和服裁縫 光文社 1970 P 36
- 8) 阪本弘子：新被服構成学 相川書房 1984 P 66
- 9) 仲村洋子・永野順子：和洋女子大学紀要30 家政系編 P 103～111 1990

(本学専任講師)